

## 韓国における日本史研究の新傾向

金 善民

### (1) はじめに

韓国における日本史研究は両国の歴史的関係と政治外交状況のような〈学問外的要因〉によって支配されてきた。特に、豊臣秀吉の朝鮮侵略と日韓併合という不幸な歴史的イベントは両国関係のすべてを包括する最も大きな要素として作用していることは事実である。このような不味な記憶と経験は被害者である韓国にとっては加害者である日本に対するあらゆる認識を感情的且つ複合的なこととし、日本の歴史と文化を客観的な学問の研究対象にすることが困難になっている。

### (2) 韓国における日本史研究の歩み

#### ① 第一期：研究の空白期（1946-1965）

戦後、日本に関心を持つ自体が親日的と言われる社会的な雰囲気の中で日本史に学問的な興味を持っていた研究者の立場は大きく縮小された。1952年、〈季承万ライン〉によって、代表されるように反日感情が激化され、1965年韓日国交正常化以前まで韓国の日本史研究は不毛地帯そのものであった。当時、韓国歴史学界の当面課題は植民地時代に他律的に形成された所謂〈植民史観〉の克服と韓国史の正体性確立であった。従って、日本関係研究も日韓併合など日本帝国主義の実像を暴露、糾明することに限られている<sup>(1)</sup>。

#### ② 第二期：研究の模索期（1965-1980）

1965年韓日国交正常化以降、いろいろな方面で両国の交流が活発になることによって、日本に対する知的関心は増加した。この時期、日本研究を主導した分野は政治外交史であった。その主な関心は日本の近代化である。主にアメリカでの留学経験を持つ研究者達を中心になって、アメリカと日本の研究成果を紹介し、あるいは批判する論著が発表された<sup>(2)</sup>。また、1978年、〈現代日本研究会〉が結成され、近現代の日本政治の諸問題を幅広く考察した論著を続けて出版した<sup>(3)</sup>。このような研究成果は当時〈経済開発5ヶ年計画〉で象徴される祖国近代化政策に日本のモデルを示すことで社会的な要求に応じたものだと考えられる。しかし、当時に研究は社会科学的方法論に傾き、一次史料に対する厳密な史料批判及び分析が欠けたところがあり、純粋な歴史学の研究とは見ず側面がある。

#### ③ 第三期：研究の構築期（1981-1994）

1982年、所謂〈第一次日本歴史教科書波動〉によって、日本の歴史認識に関する社会的な関心が増えた。

この頃、アメリカや日本から帰国した留学生らが韓国の重要大学に専任として赴任し、彼らによって大学院と学部日本史講座が開設された。また、日本史関連書の翻訳や方法論に関する単行本が出版され<sup>(4)</sup>、日本史研究のための基本的な環境が構築される。

#### ④ 第四期：研究の活性期(1994-現在)

1994年、日本史研究の専門学会として〈韓国日本史学会〉が結成され、翌年学会誌〈日本史研究〉が創刊された。この学会は学会誌の創刊辞で〈個別的且つ分散的な専攻分野の研究が研究者たちの繋がりを深め、体系的な研究を可能にする。〉ことを明らかにしている。さらに、学会誌が〈研究者相互の共同研究と情報交換及び組織的な研究の空間であることを強調し、客観的且つ主体的な研究の場、国際的な学問交流の窓口であることを宣言している。この二十年間(1984-2003)発表された日本史関係論文の数が戦後発表された論文の90%、特に、この十年間の成果が全体80%に至っている<sup>(5)</sup>。

ところが、最近では日本に対する大衆的な関心が高潮され、または日本など留学先から帰国してくる研究者が増えつつあるにもかかわらず、研究の量的な面では大きな変化が見られないことは注目すべきものである。それは次のようなところから起因するものであると考えられる。ひとつは、現実的に投稿が可能な日本史関連雑誌が限定されているからである。ふたつは社会的な関心が現在に集中され、純粋な日本史研究よりは現代の文化、社会に関する教養的な知識が求められていたからである。

しかし、もっと本質的な理由は日本史学界の膨大な研究成果とこのような研究成果に国内の研究者の深い理解度と関係がある。すなわち、国内の研究者たちは日本学界の動向に詳しく、それが敢えて自分の研究領域を縮小される結果を齎したとも言える。

### (3) 韓国における日本史研究の新傾向

#### ① 日韓関係史研究における主題の多様化

未だに、政治、外交関係の研究が高い比重を占めているが、研究主題が文化、生活史、女性史まで拡大されるようになった。これは政治外交関係から派生した民間次元の人的交流などの関心が Post-Modern という時代的な流れと連動してより拡大された次元で論議する試みが実験されている。

② 研究の重要な争点に対する通史的な整理作業

その代表的な例として〈日本史学会〉による天皇制<sup>6)</sup>、〈韓国古代史学会〉による日韓関係史研究の争点分野の整理<sup>7)</sup>がある。そのような研究は既存の研究成果を改めて理解し、今後の研究動向を精密に把握できる契機を与えてくれると思われる。

③ 大衆のための日本史叙述

日本史専攻の研究者たちの共同作業として『日本人の選択』が刊行された。これは古代から近代までの日本の歴史と文化を取り扱いながら、既存の日本が自ら整理した日本歴史や文化をそのまま翻訳する段階から韓国人の理解枠組みの中で説明される日本の歴史を紹介している。現代の日本を理解するために、過去と現在が作られた時点、その時、行われた日本の選択に関わる内容を中心として日本の現在と未来を考えてみる。

(4) 韓国における日本史研究の課題

① 韓国における日本史研究の独自性

戦後、地域学の一環としてアメリカで始まった日本史研究は既存研究と資料の検討の上に英米の人文社会の方法論を連結して独自の領域を構築してきたとも言える。このような成果は日本の自国史研究にも肯定的な影響を及ぼしたことは事実である。しかし、韓国でこのような地域学に相乗りをすることは否定的なところが多い。それは西洋中心主義の克服ができなくなるからである。従って、新しい方法論的な模索が行われない限り、韓国の日本史研究は日本研究の延長あるいは英米の模倣の段階を超えられないと思う。

② 研究目的の多様化

既存の日韓の特殊な歴史的関係の理解と究明を主な目的とする研究風土では日本史の客観的な理解は困難である。純粋な人文学的な関心の対象としての日本史研究、または学際的な共同研究が必要である。

③ 日本史関連用語と概念の整理

最近、日本史関連書物の翻訳作業が盛んになってい

る。それで翻訳が研究基盤の拡大に繋げるために、統一された日本史用語集を想定した資料の蓄積が必要になってきた。それによって、資料集や歴史地図のような基本資料に使う用語と概念の混乱を免れる。

注

- (1) 李奇範『韓日合邦史』(民衆朝鮮社、1946)、金昌憲、『日本の極東侵略秘史』(白揚社、1949)、文定昌、『近世日本の朝鮮侵略史』(柏文堂、1964)等がある。
- (2) 裴成東『日本近代政治史』(法文社、1976)、韓培浩『日本近代化研究』(高麗大学出版部、1975)等がある。
- (3) 主な研究として『現代日本の解剖』(ハンギル社、1978)、『国権論と民権論』(ハンギル社、1981)、『自民党の長期執権研究』(ハンギル社、1982)等がある。
- (4) 金容徳、『日本近代史を見る視覚』(知識産業社、1991)
- (5) 金善民〈回顧と展望－日本前近代〉『歴史学報』、p.183(2004)
- (6) 『日本史学研究』16、17合輯(2002)で特集として天皇制に関する時代別研究史の整理をしている。後に、『記憶と戦争』(梨花女子大学出版部、2003)に再収録されている。
- (7) 韓国古代史学会は〈古代韓日関係史の新しい視覚〉という企画として特集を組んでいる。、『韓国古代史研究』27、2002)

参考文献

- 金善民〈回顧と展望－日本前近代〉『歴史学報』、p.183(2004)
- 金容徳、『日本近代史を見る視覚』(知識産業社、1991)
- 南基鶴、〈歴史学の日本研究〉『韓国の日本研究』(ソウル大学、1999)
- 朴秀哲、〈韓国の日本史研究動向〉『韓国の日本研究』(ソウル大学、2000)
- 朴晋雨、〈韓国における日本近現代史研究の動向〉(『年報日本現代史』、1996)
- 任城模、〈光復60周年韓国日本史研究の成果と課題〉(『韓国歴史学の成果と課題』、2005)

きむすんみん／韓国淑明女子大学